
東方光闇録

DARK 0(元 レア)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方光闇録

【Nコード】

N1053S

【作者名】

D A R K 0（元　レア）

【あらすじ】

自分の中にある光と闇。どちらが本当でどちらが嘘か。高校生神部黒央は幻想の地にて何を見るのか――――

始まり（前書き）

再出発です。以前モバゲーに投稿していた作品をこちらでやり直すことにしました。

最初の部分を少し変更して、あとは依然と同じようなストーリー展開で何とか完結まで持っていきたいと思います。

初めて読まれる方も、そうでない方もこれからどうぞよろしく願います。

始まり

世界は往々にして理不尽なものである。

それに気づくか気づかないかはその人の生き方次第。

目を背け、背を向けて、自分の良いように解釈し続ける。

それが出来る人は恐らくいつも明るく、そして運よく生きていくことができるのだろう。

しかし、そんな人間ばかりでないのがこの世の理というものである。

個人的な意見を言うなれば、もし世界がそんな人間ばかり皆が前向きで、皆が明日に目標を見出して生きているならばそんな世界は恐ろしく気味が悪い。

世界はバランス。

正があれば負があって、勝ちがあれば負けがあって、光があれば闇がある。

そうやって世界は真ん中という基準を作っているから、個体によって差が出来て面白い。

まあ、完璧に自論ではあるのだが。

そこで最初の話に戻る。

世界は往々にして理不尽。

これはつまり、時として自分が望む望まないに関わらずそのバランス——いわば世界の帳尻合わせにつき合わされた事を悟るということだと俺は思っている。

それが落し物をした時の事なのか、厄介な事件に巻き込まれた時の事なのかは、まあその人の感覚の問題なのだろうけど。

とにかく、これはそういうお話である。

世界なんて言うスケールのでかいものに全てを押し付ける訳ではないけれど、始まりは何とも理不尽極まりない事だったということだけは声を大にして言うておく。

黒田市。

俺の住んでいる市の名前である。

市の中心部には都心顔負けのビル群が立ち並び、娯楽施設も多く存在する一方、少しでも郊外に足を運ぶとアスファルトが田畑に変化し、ビルの代わりに多くの木々などの自然が顔を見せるヘンテコ都市である。

中心部を囲うように大自然が原生していることから、近年日本の新

しい都市像として”革新都市”と呼ばれているらしい。

住んでる身としては慣れ親しんでいるからか、とても大仰な文句に聞こえるのであるが、客観的な立場からの意見のほうが理には適っているためそれに対して言及することはやめておく。

さて、そんな場所で生活している俺は現在十七歳の高校二年生。

今も高校生らしく、学校から家までの距離を自転車で行く下校中である。

俺の家は郊外にある祖父の所持する武家屋敷である。

時代錯誤な建築様式とだだっ広い敷地を有しているために近隣では何かと有名な屋敷となっている。

まあ、祖父の家に住んでいるとなればそれなりの家庭の事情というものがあるのだが、実のところ俺は正直そこら辺の事をよく覚えていない。

概要だけを軽く説明すると、俺は孤児院の出身であり、だいたい五歳ごろから施設にいたということらしい。

小さい時の事なので、孤児院に入る前の事や両親の顔なども全くと言っていいほど記憶にない。

そして、六歳と半年が過ぎたところに今現在の祖父と祖母に引き取られる訳である。

だから、戸籍上は祖父は父親という立場になるわけだが、さすがに六十前半のファンキーじじいを父親というには無理があるので、祖父という関係に落ち着いている。

実際、じじいも孫のような存在が欲しかったらしく、俺を引き取った時からえらく自分の事を”じいちゃん”と言うようになったとのこと。

一方、祖母は破天荒な祖父とは対照的にものすごく落ち着いた性格。おおよそ、祖父と同じ年ぐらいであるがしわも少なく、目力も強い。ため、昔は相当な美人だったのだろうと勝手に予測している。

なんでこの二人が結ばれることになったのか甚だ疑問に思うくらい対照的な老年夫婦である。

とまあ、俺の家族背景はこんな感じである。

自転車は快調にスピードを上げ、郊外の木々を横目に踏み鳴らされたあぜ道を進んでいく。

特に問題なく、数分後には家に到着。

自転車を門の裏側に立て、前かごに入れていたカバンを手に取り、玄関へと歩を進める。

「ただいま」

「さあ、稽古じゃ」

玄関の戸を開け、お決まりの挨拶をすると、有無を言わせない迫力のある声がそんな唐突なことを言い出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ 会話のキャッチボールって言葉知ってるか？　じじい」

「じいちゃんは昔から横文字を一切受け付けん脳味噌じゃからなあ」

そう、この白髪にこれまた白い顎鬚を蓄えた仙人みたいな容姿の老人が俺の祖父である。

念のためではあるが、このじじい、痴呆症の類は欠片も見つかっていない健康そのものである。

「・・・・・・・・ せめて少し休んでからでいいだろ。昨日も夜遅くまで英語の予習で起きてたんだからさ」

「ええ・・・・・・・・」

「ええ」 じゃない。ガキかお前は」

そう言って靴を脱ぎ、玄関でそろえてから長い廊下を歩いて自分の部屋に向かう。

部屋に着くとカバンを机の上に放り投げ、ベッドに身を投げる。

そのまま深く息を吐き、学ランのポケットにある携帯を取り出して時間を確認する。

今は夕方の四時ちょうど。

じじいの稽古はともかく少し休むことにしよう。

最近は大忙しかったからか少々寝不足だ。

何年かぶりに昼寝としゃれ込むのも悪くない。

ゆっくりとそのままの体制で目を閉じる。

だんだんと暗くなっていく部屋を見ながら、どこことなく言いようのない不安が胸に渦巻く。

目が覚めたら、この景色が見えなくなってしまうようで。

所詮、俺の勝手な空想だ。

ただでさえ刺激の少ない日常。

少しぐらい非日常を夢見たって、罰は当たりやしない。

自分の中でそう踏ん切りをつけると、自然と瞼が重くなっていく。

俺はそのままゆっくりと意識を手放していく。

それが俺の人生を変える理不尽の始まりだとも知らずに。

始まり（後書き）

いかがでしたか？

少し終わり方が強引だった気がします。はい。

えと、感想やご意見待ってます。辛口、甘口、ご質問など何でもウエルカムです。

まあ、さすがにこれだけじゃ意見の出しようもない気がします。

恐怖（前書き）

何時になったら、前書いた所までたどり着けるのだろうか。

取り敢えず、第二話です。

恐怖

何年ぶりの昼寝から目覚めると既に外はどっぴりと日が暮れていた。学ランのまままで眠っていたせいとか妙に息苦しい。

「・・・・・・・・ちっ、マジかよ」

身体をお越し、部屋の勝手口の上に備え付けられあ時計を見て思わずそう毒づいた。

時計の針はどちらも垂直に真上に伸びており、自分が知らぬ間に日を跨いでいた事を知らしめる。

何故こんなにも寝てしまったのかなんて原因が分かるはずもなく、ただ時間を無駄遣いしてしまったというちょっとした罪悪感に襲われる。

「宿題やってねえし、飯も食ってねえ。おまけにじじいの稽古サボったなんて・・・・・・・・後で何を言われるやら」

ぼやくも過ぎてしまった事はしょうがない。取り敢えず何か飲み物でもと呷く。

「・・・・・・・・ん？」

そうして部屋を出ようとしたその時、何か言い様のない違和感が俺を襲う。

何故かは分からないが、この部屋を出たら最後、無事にここに舞い戻ってくる事ができないような――――

「・・・・・・・・アホらし」

何とも馬鹿な話だ。いくら非日常が欲しいからって、根拠もない感覚を自分ででっち上げるなんて・・・・・・・・

背中越しに引き戸を閉める。その音が嫌に耳に残り、訳もなく苛立った。

いや、苛立ちの原因は分かってる。俺は非日常を求めている。ただ、

この世界での常識の中で生きてきた俺が自身のそんな思いを認めた
くないだけだ。

ありもしないものを求め続けるなんて、言葉に出せば聞こえはいい
が、常識的に考えればただのイタイ奴だろう。

非日常を求める自分と、日常を求める自分。

その二つが俺の中でぶつかり合って、すっきりしないだけだ。

厄介なのはここまで自分で整理が出来ていても、この苛立ちが消え
ないって事。

「つとに．．．．人間って不便だよな」

独白はむなしく響き、俺は板張りの廊下を歩いていく。

台所にある冷蔵庫から麦茶の入っている容器を取りだし、それをそ
のままらっぱ飲みする。

季節は夏上旬。冷たい麦茶が一番合う季節のはずだが．．．．

「今日は冷えるな．．．．．」

今夜は何時もととは違い、学ランのままでも寒気を覚えるほどの妙な空気のような。

直ぐに麦茶を冷蔵庫にしまい、代わりに冷蔵庫に入れてある魚肉ソーセージを一本無造作に取りだしてビニールをはぎ始める。

魚肉ソーセージを

頬張りながら居間を後にしようとする、ふと廊下から生温い風が俺の頬を吹き付ける。

その事にふと違和感を覚え、何気なくエアコンのリモコンを確認する。

変化はなし。

電源は入ってないし、消し忘れてもなかった。

「．．．．．気のせい．．．．．か」

不気味な雰囲気は何時しか俺の身体は小刻みに震えていた。そんな

自分の身体に驚きつつも、意味もなく震える身体を押さえつけようとする。

「・・・・・・・・なんだ？　これ・・・・・・・・」

しかし、俺の身体の震えは止まらない。まるで俺が気づかない内に何かの恐怖に当てられたようにブルブルと震え続ける。

・・・・・・・・おかしい。何だって唐突にこんな事になっている。

包まれる闇の中で俺は思考する。ついに俺はありもしないものを、そこにあると言ってしまおうような馬鹿になってしまったのか・・・・・・・・

違う。俺は正常だ。自分の事は良く知っている。例えばそれが自分にとって不都合な事でも目を背け、認めようとしないことはあるが、ちゃんとそれも自分なのだと理解はしているのだ。

俺は何処までも正常である。

なら、この震えは何だ？

身体の隅々が拒絶を訴え震え出す。意味がわからない。

震える足を無理やり一步前へ。とにかくまずは行動だ。この寒気の

正体を確かめる。

そうして前に出した右足の次に左足を運んだ瞬間、ベチャリという嫌な音が聞こえた。

目が暗闇に慣れ、少しずつ周りのはっきりと見え始める。そんな中で音は不規則にベチャリ．．．．．ベチャリと俺の耳を震わせた。

間違いない。俺は恐れている。この冷えきった空気に怯え、得体の知れないこの音に心底恐怖を抱いている。

手足は震え続け、喉が渴きを癒したいともがく。

はっきりとしてきた視界には、純粋な黒が映っていた。それは暗闇に慣れた視界の中でさえ、純然たる黒のままその小降りの身体を震わせ、四つん這いになっている足らしきものを意味もなくその場で踏み鳴らしていた。

ベチャリ．．．．．ベチャリ．．．．．

その不快な音と、正体の分からない黒い塊がより一層俺の恐怖をかきみだす。

怖い、逃げたい、叫びたい。

そんな感情が渦巻くうちに俺の足は少しずつ後ろに下がり始めた。ゆっくりと目の前の黒い塊に気づかれないように音をたてないように。自分にそう言い聞かせながら、一步一步後退していく。

ただ、あの塊から距離を取りたくて、離れたくて。それだけの感情で俺は歩を進める。

———ガシャン。

「————っ！」

しかし、ここは家の中。延々と歩き続けられるような広い場所ではない訳で。

「……………何だっぺんだよ。お前は」

後ろにキッチンがあるのも知らず、背がシンクの壁に当たり、乗っていたボールを落としてしまった。

「……………」

あの生々しい音が止む。不規則に上下していた動作が一瞬だけ止まった。

部屋にはボールが縁を下にして回っているガラランガランと言う音しか聞こえない。

塊が頭らしき部分をゆっくりと回転させる。

ガラランガラランガラン。

心臓が痛いぐらいに早くなる。畜生、畜生。

ガラランガラランガラン。

足がすくむ。異様に冷たい空気を吸い込むたびに肺が針で刺されたように痛む。

ガラランガラン。

眼球はとつくに乾いているのに瞬きが出来ない。苦しくて苦しくて首をかきむしりたくなる。

ガラランガラ．．．．．

そうか、これなんだ。俺は妙に納得してしまった。この状況がどんなものか。これから俺はどうなるのか。

ガラ・・・・・・・・

イヤだ。そうなってしまふのはイヤだ。俺は咄嗟に台所の引き出しを見向きもせず漁り、そこにしまつてある包丁を取り出した。

ろくに確認せず、包丁やらナイフが入った引き出しを引っ掻きまわしたもので手のひらからは血が流れている。

そんな手のひらをまじまじと見つめた後に、ゆっくりと顔を前に向けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこには血よりも遥かに濃い二つの赤い丸が俺を見据えていた。

身体が震え続ける。動転して息を吸うことを忘れる。

根拠はない。しかし、確信する。

これが”死”だ。

そう思い至ったのと、黒い塊が動くのは同時だった。奴は予備動作もなく、ただ安直に飛びかかってくる。

「ちくっ………しょお!!」

俺がそんな唐突な奴の行動に反応できる訳がなく、包丁という武器を持っている事も忘れ、両手を目の前で交差させ、目をかたく閉じた。

ガシャアンという盛大な音を立て奴が台所に突っ込む。飛びかかられた俺は全身を叩きつけられ、呆気なく意識を手離す。………はずだった。

「はっ、はっ、はぁっ………!？」

荒い呼吸をしながら、俺が恐る恐る目を開けると俺は台所の壁にもたれかかるようにして座っていた。

上を見上げると、流し台に全身を派手に叩きつけた奴が動きづらそうに蠢いている。

………どうやら俺は逃げ腰のまま無意識にへたり込んでいたらしい。それが項をそうして、奴が俺の頭上を飛び越えていく形で

難を逃れたようだ。

ついでに。俺はついでに。とんでもないラッキーだ。今はどんな高額のお宝くじが当たった時よりも運がいいに違いない。

しかし、ただそれだけだ。現に奴は未だに俺の真上でもがいているし、危険な状況が続いているのは間違いのないことだ。

けれど、俺はまだ生きている。生きてここに
いる。その事実だけで俺は救われた気分になった。生きていれば抗える。恐ろしいほど感じられるこの”死”の中でも自らを生かす希望が見えてくる。

気分が落ち着いてくる。たった一度の幸運が俺を先程より遥かに冷静にさせてくれた。本当にありがたい。

俺は生きたい。こんな訳の分からない生物なのかすらもはっきりしない奴に人生を奪われてたまるか。

こんなに唐突に納得できないまま死んでなんてやるものか。

言いたい事は山ほどある。この激情は何を言ってももの足りないぐらいだ。

ただこれだけは言わせてもらおう。

「俺は……死なない!!」

その言葉を皮切りに俺は弾けるように駆け出した。

後ろで蠢く奴に目をくれる事もなく、ただ居間の開け放たれた扉から長い廊下へと飛び出す。

目指すはこの廊下を駆け抜けた先にある縁側。そこから中庭に出て、そのまま塀に向かって庭の中を突っ切れば家の門はすぐそこだ。

その後はまたその時に考えればいい。今はとにかくこの屋敷から抜け出す事を考えろ。

自分にそう言い聞かせ、俺はひたすらに足を動かす。

縁側まで全力疾走し、裸足のまま中庭に飛び降り、庭の岩や生け垣を飛び越え、狂ったかのように門から屋敷を飛び出した。

「はっ、はっ、はっ……！！！」

門を飛び出して気が抜ける。膝に手をつき、肩をこれでもかと上下させる。

視線を屋敷に向ける。奴の姿はない。あの不気味な冷たい空気も感じられない。あの耳に障る生々しい音も聞こえてこない。

「追って来ない……のか」

再び言うが奴の姿はどこにもない。俺には奴がどういう性質を持っている、どういった目的でこの屋敷に入り込んだかなんて分かるはずがないが、しかし、奴は少なくとも俺の事を追いかけては来ていないようだ。

理由はないが、そう思えてならないのだ。奴は俺を追っては来ない。そう俺だけは……

ふと思考が停止する。

俺は今何を考えた？ 奴は俺を追ってはこない。

得体のしれない化け物であるがその目的は謎のまま。

しかし、俺を見るなり当然のように襲いかかってきた。そう、俺――人間を見てだ。

そして、目の前にいた人間はこうして逃がしてしまったが、あの家には人間は俺だけではない。

「……………っ！ くそったれが！！」

そう俺という目標を失った奴が次に狙うのは、この世界でたった二人だけ俺の家族。

気づけば俺は無我夢中で走りだしていた。

台所からずっと握りしめて離さなかった包丁を、固く握り直し、玄関の引き戸を乱暴に開け、靴も脱がずに廊下を疾走する。

ちくしょうが、ふざけるな！

心の中で叫びながら、角を曲がりまた走り出す。

あの二人は俺の恩人だ。

小さい頃右も左も分からず、ただ施設で塞ぎ混むように過ごしていた俺を迎えてくれた。

孤独感に苛まれ続けた、あの出口のない闇の中から俺を見つけ出してくれた。

血の繋がりもましてや何の縁もないガキだった俺を養ってくれた。

嬉しかった。

自分が初めて認められた気がして、とても嬉しくて、感謝してもしきれなかったのだ。

二人の寝室はもう目の前に迫る。

必死に動かしていた足を、これでもかとさらにがむしゃらに動かす。

「……………そう、二人は俺の光。

失いたくない。まだ、何も返していない。

だから、俺は……………」

刺し違えてでもあの化け物を殺す。

そう、決心して俺は二人の寝室の扉に手をかけた。

「じじい！　　ばあちゃ……………」

勢いよく扉を開け、叫ぶ。

だが、室内の光景を見て俺は言葉を失った。

畳の上に敷かれている二つの布団。そこに二人はちゃんと横たわっていた。

身体の節々から血を流し、今にも死にそうな顔色で。

頭が真っ白になる。

全身から力が抜け、眼球が大きく開かれた瞼の中で痙攣する。

あれほど強く握っていた包丁が手のひらからこぼれ落ち、床に刺さるのとはほぼ同時に膝から崩れ落ちる。

そんな。うそだ。ウソだと誰か言ってくれ。これは夢だと。本当の俺は今もまだあの昼寝の続きで眠っていて、これはその眠りの中の夢なのだと。

けれど、そんな答えは当然返ってこない。

また、これが夢だと証明してくれるものも何もない。

……ベチャリ。

またあの音が聞こえる。

その音に絶望と虚しさに満たされていた心に憎しみが溢れだす。

それはまるで炎のように俺の心臓を焦がし、身体を駆り立てる。

ふざけるな。

お前がいなければ。

音のする天井を睨み付ける。そこにはやはり奴がいた。

奴は天井に張り付きながら、その赤い眼を俺まなこに向けている。

ふざけるな。

勝ち誇ったように見下しやがって。

正直なところ、奴が何故この家に来て、何故こんなことをしているのか。そもそも、奴は一体何なのか。分からないことばかりではある。

けれど、そんなことは今は関係ない。

憎くて憎くてたまらない。奴は俺から奪ったんだ。光を。俺の唯一無二の家族を。

だから、俺はお前を許さない。お前は此处で死ぬべきだ。

例外はない。お前が散らせた命、自らの命で償え。

手伝ってやる。俺がお前を――――

「殺す」

それが皮ぎりとなり、俺と奴が同時に互いに飛び掛かる。

拾った包丁を前に突き出し、ただ真っ直ぐに奴に突っ込んだ。

奴は身の危険を感じたのか、その楢円の体型を変化させ、長い蔓のような黒い触手を二本、前足のように生やすとその触手で床を押すようにして俺を飛び越えていく。

「っ！ まだまだああああっ！」

すぐさま振り返り、迫ってくる触手をがむしゃらに包丁で切り払う。

もう無茶苦茶だ。格好も何もありやしない。

けれど――――

「そうじゃなきゃ、素人が殺れる訳ねえだろうが！」

そうして、無茶苦茶な体勢のまま奴に飛び掛かった。覆い被さるように奴を押さえ、激情に任せてその包丁を降り下ろした――

「……………か…………っ」

つもりだった。

しかし、包丁は降り下ろされず、俺は胸の辺りを強く突かれた感覚にたまらず息を漏らす。

同時に激しい痛みが突かれた場所を起点に全身に広がり、暖かい何かが俺の腹に滴り落ちてくる。

あれほど暑く火照っていた身体が嘘のように冷え始め、あれほど強く握りしめていた包丁が簡単に手からこぼれ落ちた。

何が起こったのか。意味が分からないまま視線を落とす。そこには奴の触手。その黒い蔓が俺の左胸を貫いていた。

自分の身体のこととは自分がよく知っている。とは、よく言ったもので自身の今の状態を見て、直感に近いものが俺の頭をよぎる。

俺はここで死ぬ。

それを悟った瞬間、俺の身体は簡単に崩れ落ちた。操り人形が糸を切られたように俺はだらしなくその身を横たえる。

薄れ行く意識の中、朧気に映る視界の端に奴がいた。

奴は横たわった俺の身体を数秒凝視すると、おもむろに触手を俺の

左胸に空いた穴に押し当てる。

もう、視界は真っ暗。意識も無くなる寸前。よく分からない言葉が俺の頭に直接入ってきた。

――ミツケタ。

こうして俺は死んだ。何も出来ず、何も返せず、多くの未練を残しながらこの生涯に幕を閉じたのである。

恐怖（後書き）

感想お待ちしています。

一度目の終幕（前書き）

さて、今回ようやく東方キャラの登場です。

なんだか、キャラ崩壊がしていないか果てしなく心配でございます。

それではどうぞ。

一度目の終幕

妖怪——八雲紫は暇を持て余していた。人間の常識とは違い、彼女は文字通り人を逸脱した存在——人外である。

もちろん、その寿命は人間と比べれば月とすっぽん。蟻と象ほどの差がある訳であるが、長寿というものは得てして退屈と付き合うようなものである。

「……………暇潰しにこちらに来てみたのはいいけれど……………
・やっぱりこっちはあっちと違って面白みがないわね」

彼女は退屈そうにため息をつく、無限に広がる夜空を当たり前のように滑空する。この闇夜では到底意味を成さないであろう日傘を優雅にさしたまま帳の中を宛もなくさまよう。

「……………退屈だわ。退屈で死んでしまいそう」

そう言う彼女の顔は軽口を叩いた割には沈んだ面持ちであった。

そんな表情を浮かべるのは、今の言葉があながち間違いでもないからである。

彼女のような長命な存在にとっては正に退屈は死を招く原因なのだ。

長寿。聞こえはいいが、実際は退屈との戦いである。

長く生きれば生きるほど、精神は様々な事に対応し、肥えていく。

そうなってしまった感覚は、ごく一般の娯楽や快楽では満たされない。

ましてや、彼女は人外。元来、人から逸脱した彼女が並大抵の事で満足する訳がない。それに長く生きた経験も合わせれば、いったい何が彼女を満足させる事が出来るのだろうか？

故に退屈。退屈なら生きている意味もない。そんな結論に簡単に至ってしまう可能性が大いにあるからこそ、彼女は言葉の調子に反して沈んだ表情を浮かべていたのである。

（何をいまさら……）

彼女は心の中でそう呟くと、自嘲の笑みを浮かべる。

考えても仕方がないのである。それは今までに何度も考え、感じてきた事なのだから。

彼女自身も気分を切り替えようと、その場に停止し、背伸びをした。

その瞬間である。彼女の纏う雰囲気が急激に張りつめる。

鋭い視線は彼女の真下。今の時代には少々時代錯誤な大きな武家屋敷に注がれていた。

彼女はこちらの世界ではほぼ感じる事のない気配を感じ取り、何処か納得のいかないような表情を浮かべる。

「……殺気？ それにこの不安を助長させるおぞましい気配……」

そう、彼女が感じたのは殺気。それもかなり濃密な、である。

感じた時間こそほんの数秒だったが、その殺気の後を継ぐように今度は形容し難いおぞましい空気が場に漂っていた。

その空気に彼女は知らず知らずのうちに笑みを浮かべていた。

「前言撤回。今宵はとても楽しめそうだわ。こういう事がたまにあるからこの世界は止められないのよ」

——まあ、たまにと言っても百年に一回程度だけど、と紫は先

とはうって代わりとても楽しそうな顔でゆっくり高度を下げていく。

「さあ、藪からは鬼が出るか蛇がでるか。何にせよ精々この大妖怪を楽しませてくれることを期待していますわ」

そう、いないはずの第三者に語りかける紫。その声は、何処までも妖艶　で、何処までも威圧的で、何処までも嬉々とした響きを持って闇夜に溶けていった。

「……………これは」

屋敷に侵入した紫は屋敷中を隈無く探索し、ある一室にたどり着いた。

そこには老いた夫婦らしき女と男、そして学生服を着た少年が血を流しながら倒れていた。

「……………ふむ」

その光景にこれと言った反応を紫は示すことなく、老夫婦に近寄り、右手の手袋を外すとその手を二人の首に順に押し当てる。

「脈はあるわね。……………惨状に比べて傷もそれほど深くない。これをやった子はよっぽど散らかす事が得意みたいね」

ふふっ、と艶やかに笑うと彼女は指を一振りする。すると、老夫婦の身体にあった幾重もの切り傷が自らの意思を持つかのように閉じていった。

「……………んっ、……………」

「あら、気がついた？」

老人が傷が塞がると同時に眩しげに目を開けるのを見て、紫は満足気に微笑んだ。

「……………妖怪のお嬢さんがわしに何のようじゃ？」

「あら？ 私がどんな存在か分かるの？」

そんな老人の言葉に紫は初めて驚いたような顔をしてみせる。

「昔、お前さんの同族を相手に仕事しとったからな。特有の匂いがプンプンするわい」

老人はそんな紫の言葉に事もなげにそう返した。

「そうじゃ！ ばあさんは……………」

「心配ないわ。命に別条はないし、今は眠ってる」

紫はそうとだけ言うと、老人に目を向けることなく歩を進める。その先には一人の少年の変わり果てた姿。

「……………なんじゃ、これは」

その姿に老人は言葉を失った。その変わり果てた姿を見て、信じられないとでも言うように少年の死体から目を離すことなく身体を硬直させていた。

そんな老人を尻目に紫はその死体の側に立ち、何かを見定めるように死体の端から端までを丁寧に観察し始める。

「何……………これは」

そして、紫はそう一言呟き端正な顔を苦々しく歪めた。その顔には疑念と悔しさ。その二つがありありと示されている。紫が感じた殺気とおぞましい空気。その出所が特定できたのである。

その出所はこの死体であった。

殺気はもちろん一瞬の出来事であったため、今はそれじたいは残ってはいない。しかし、殺気には残滓が残る。

料理をした後の残り香のように、その痕跡は感じ取るものがその感覚を鋭敏に感じ取れる事が可能ならば、強くその気配が残っているものなのである。

紫はまさに今その殺気の残滓を感じ取っていた。それだけならば、良かったのであるが、今回は少し勝手が違ったのだ。

彼女が死体から感じ取ったのはそれだけではなかったのである。

この場に来るきっかけとなった、形容し難いおぞましい空気。それが少年の死体を起点としていたことに紫は焦りにも似た感覚を感じていた。

殺気と同様この空気の残滓が感じ取れていたのなら問題はなかった。しかし、この不可思議な空気は今現在もこの空間を取り巻き続けている。

その起点が既に死亡しているのにである。

眼前のその光景を見て、紫は思案顔で目をつむり、数秒うつむいた後、男性の方に顔を向ける。

「・・・・・・・・息子・・・・・・・・」

そう、絶望を張り付けたような顔で声にもならない声を上げる老人。それを見て紫は努めて冷静に言い放つ。

「死んでるわ。完全にね」

——ただ、と紫は続ける。

「心臓に何か得体の知れないモノが寄生している。これが今良くない気を発しているわ。見てごらんなさい」

紫の言葉に老人は息子の死体に近寄り、紫が指差した左の胸部を覗き込んだ。

「これは……！」

そこで老人が見たのはぽっかりと空いた風穴が小さく胎動している光景だった。

「この死体に着いたモノはおそらく自分自身を自分が貫いたこの子の心臓の代わりにしているの。そこから、彼の身体の破損した部位を修復するように力を使っている。このおぞましい空気はその力の余波と言った所かしら」

「だったら、息子はこのまま行けば助かるのでは……」

老人の言葉に首を横に振る紫。それと同時に何処からともなく扇子を取りだし、少年の死体を指す。

「言ったでしょう。彼は完全に死んでいる。身体が戻っても、一度止まった命は戻らないわ。それにこのナニカはもつと厄介なモノよ」

そこで紫は死体を指していた扇子を、おもむろに何もない空中で滑らせた。

すると、その軌跡をなぞるように空間に不可思議な裂け目のようなものが現れた。

その裂け目に寄りかかるように紫は腰を降ろし、話を続けた。

「このナニカは結論から言えば、この子の身体を欲しているの。このモノはこの子の身体を使って何かをするつもりよ。だからこそ、この身体を万全に整えている状態。もし、この身体が万全の状態になった時は……この子は再び動き出すわ」

「しかし、心臓は止まっているのじゃろう。なら動くことなど……」

「私が言った完全に死んでいるってのはただ単に心臓が動き出さないうって意味じゃないわ。放っておけば、このナニカはこの子の心臓も万全な状態にして生物学上は生き返らせてくれるでしょう」

————けれど、と紫は言葉を繋げる。

「それは以前のこの子とは全く違う存在。このナニカがとって変わった、姿形が同じだけのバケモノよ。この子は完全に死んだわ。この子の中身が完全にね」

紫がそこまで言うと、老人はもう何も言い返しはしなかった。ただ、突き付けられた事実に悔し涙を流し、顔を伏せていた。

無理もない、と紫は老人を憐れんだ。自分の息子がよく分からない理由で命を落としたと言われたのだ、理解はしても納得は出来ないに違いない。

「本当に何も出来ないのか、本当にこの子は……このまま死んでいくのか？」

老人の問いかけに紫は答えない。空中に浮かぶ、裂け目に腰をかけたまま老人を見下ろしていた。

「妖怪のお嬢さん。わしはこの子を貰った時、この子は幸せにしてやらなければ嘘だと思った。そう思って、今まで育ててきたつもりなんじゃ」

「貰った？　なら……」

「ああ、血は繋がっておらん」

自嘲気味に老人は呟く。

「血も繋がっていない赤の他人が見ず知らずの子供を幸せにしてやりたいなど偽善なのかもしれん。じゃが、お嬢さん。お主はこの子が孤児院にいた頃、どんな目をしておったか知っておるか？」

老人は言葉を紡ぎながら涙を流す。二度と戻らない息子を思いつつ、守りきれなかった自分を悔やみつっ。

「年端にもいかん子供が……殺人者と同じ目をしておったのだ。大人がすくんで動けなくなるぐらいの冷たい目を。想像できるか？ たった六つか五つの子供がそんな目をしなければならなかった状況が！！」

老人の叫びにも似た告白に紫は息を飲んだ。紫は何度も言うが、妖怪である。

人間とは考え方も違うし、常識も違う。生きるためには他の生物を殺すことも、それが自分達と似ている人間であろうと迷うことはなかった。

けれど、その状況が殺す事に多少は慣れている彼女ですら想像出来なかったのだ。それはどんな地獄だったのか、どんな闇だったのか。

齡^{よわい}三百年以上の彼女ですら戦慄を覚えるものであった。

「同情？　その何が悪い！　人間が他人を幸せにしたいと思って何が悪い！　だから、わしは決めたんじゃ。あの子を絶対に幸せにする……なのに」

老人は泣き崩れた。それが何の意味も持たないと知りながら、それでも泣かずにはいられないと。

「……頼む、お嬢さん。お主は他の妖怪とは違い、特殊な力があるのだろう？　それも強大な……例え方法がないにしてもわしはお主にすぎるしか方法がないのじゃ。わしはお主の同族を殺してきた敵かもしれん。しかし、それでも……」

老人はそう言って、紫の前で膝を着いた。紫とてその意味が分からない訳ではない。何かを察したのか、少し嬉しそうに微笑んで口を開いた。

——方法なら一つあるわよ。と。

その言葉に老人は涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げる。そこには驚きと希望の色。

紫はそんな彼を見て、兼ねてからの考えを話し出した。

「この子に巣くっているナニカは順調にこの子の身体を修復させている。そして、最後には心臓も修復されるでしょう。その修復が完了した瞬間に、この子とナニカを切り離すの。そうすれば、彼は身体は元通り、意識も以前の彼と同じまよ」

———ただし、条件がある。と、紫は付け足す。

「彼はこの世界とは別の世界に連れていく。こんな事になった以上、またこの子が何時同じ目に会うか分からない。それに、彼と寄生しているモノを切り離すと言ってもそれが百パーセント成功する保証もない。確率で言えば五分と五分だし、仮に成功しても何らかの後遺症が残る可能性がある。それがなんであれこの雰囲気からしてこちらの世界では到底対応しきれないものになるでしょうしね」

老人は紫の条件に迷うことなく頷いた。これが愛しい息子との今生の別れだと理解しながら、それでも躊躇うことをしなかった。

それはひとえにわが子の人生を一番に考えたから。死んでしまっ
ては意味がない。もし、生きる事が可能な選択肢があるなら、それ
を選ぶと。例え、その結果私達が苦しむことになっても、息子の命に
比べれば安いものだ。老人ははっきりと言い切った。

ばあさんも必ずそれを分かってくれと、未だ目を覚まさない老婆
に微笑みながらそう呟いた。

その姿を見て、紫はもう何も言わなかった。つられるように微笑み
を浮かべ、ゆっくりと扇子を横に滑らせた。

その動作に連動して少年のを包むように地面が割れ、ゆっくりとそ
の身体が沈んでいく。

———生きる。バカ息子。お前と出会えてよかった。

少年の身体が完全に裂け目の中に沈み込み、跡形もなく消えた後、
紫は老人に向かってこう言った。

「私は妖怪。いつも彼の味方であることはないかもしれません。け
れど、約束しましょう。あなた達は今まで私が見てきた中で最高の
親だったと———彼に伝えることを」

——それが私のできる礼儀です。

と、言い残し彼女も姿を消した。

朝日が昇る。まるで新たな門出を祝うように。

少年の生涯は一度幕を閉じた。しかし、数奇な運命は舞台を変えて彼を再び呼び戻す。

開演。ここから少年の二度目の舞台が始まりを告げる。

一度目の終幕（後書き）

いかがでしたか？

今回は完璧なるジジイ、ババ（ryゲフンゲフン、無双でしたね。

さて、次回からようやく幻想入りでございます。早く昔の場面まで追いつきたい（涙）

感想、ご意見お待ちしております。これらは作者の原動力にもなりますのでお願いします^^

後、最後になりましたが、お気に入り登録してくださった方々。本当にありがとうございます。まだまだ、非才の身、駄文万歳な訳でありますがどうか長い目でご声援頂けたらと思います。

夢（前書き）

めっちゃ遅くなりました（汗）

取り敢えずどうぞ^^

夢

世界は理不尽である。

言わずもがな、この俺。かんべくおう 神部黒央の自論である。

それを他人に押し付ける気もないし、心に留めておいたところで何かがいい方向に傾く訳でもない。

そう理解しているのに、ここでこの言葉を取り上げさせてもらったのにはそれなりの理由がある。

まず、俺はあの時死んでしまったはずだ。

家に現れた正体不明の黒い塊と、戦いと呼べるのかも分からない取っ組み合いを繰り広げ、心臓を一突きにされた。

それで神部黒央の生涯は幕を閉じたはずなのだ。

にも関わらず……………

「何で生きてんだよ、俺」

俺の心臓は穏やかに動き続けていた。何事もなかったかのように、至って平静に鼓動していた。

「ふう……………」

その事実には俺はたまらず安堵の息を吐く。

原因なんて分からない、考えうる可能性の中には後で落胆しそうなものもある。

けれど、そんなことを度外視して単に自分に命があったことに喜んだ。

「……………そっか、俺……………生きてたんだ」

—————よかった、と仰向けになりながら呟く。

俺の呟きは誰に聞こえるでもなく、この一面に広がる青空に消えていった。

—————そう……………青空にである。

俺の目の前に広がるのは曇りのない快晴の空。

しかし、俺はつい先ほどまでは屋内にいたはずなのだ。それも勝手知った自分の家の中である。

だったら、この状況はどう考えたっておかしいの一言に尽きる。

家の中で意識を失い（正確には死に）、目を覚ませば屋外にいるなど何処のB級映画だと嘆きたくなる。

しかし、まあ事実は事実だ。戸惑いはあるが、受け入れる他ないだろう。

そして、その事実を受け入れた上で言わせてもらおう。

「……………何処だ、ここは？」

世界は本当に理不尽である。

さて、少しは落ち着いてきた所で状況を整理してみよう。

俺は先ほど確認したように、一度命を落としたはずだ。

しかし、現時点で俺はこのように呼吸をし、意識も視界もはつきりしている。

この事ももちろん驚きだ。

だが、まああり得ない話ではない。

現代の医療技術を駆使すれば助かる確率がゼロというわけではないし、考えられない事はない。

まあ、可能性だけを考えるとあの時命を落としていた事の方が考えられるのだが。

それよりも不思議なのは――――

「・・・・・・・・ほんと、何処なんだよ・・・・・・・・ここ」

おおよそ現代の日本でも見られないような、目の前に広がる幻風景だった。

少し重たく感じる身体を起こし、吹き抜ける風を身体全体で感じる。

現代の開発が進んだ日本では感じられないような風の香りが鼻を突きぬけ、心地よい暖かさで俺の頬を撫でていく。

空は雲ひとつなく、澄み切った青空に目も眩むほどの光を放つ太陽が、その光で眼下に広がる草原を照らし出していた。

遠くに目をやると、今立っているこの場所は小高い丘にあるのがわかった。

連なる山々に囲まれ、農村のような建物が幾つも立ち並んだ場所があり、ほかにも暗い雰囲気放了つ鬱蒼とした森や異彩を放つ真っ赤な洋館、そのそばで輝く湖などが俺の目に入ってきた。

「……………すげ」

その幻想的な光景に俺は思わず声を漏らした。

今までに写真や映像、または直接見てきた地球上のどんな景色も今目の前に広がるこの景色には遠く及ばない。

感じたことのない感動が俺の中を満たしていった。

しかし、それと同時に俺の心には先ほどから拭い切れなかった疑念がより濃くなって噴き出してきた。

おおよそこの世とは思えないほどのこの光景。

なら、ここは本当に”この世”であるのだろうか。

もし、この場がこの世でないとしたら．．．．．目の前に広がる
幻風景にも納得がいく。

見たこともない景色、そりやそうだろう。ここが”あの世”だとす
るならそんなものを今まで見てこなかったのが当たり前なのだから。

だが．．．．．と、何気なく視線を下に落とし、左手を自分の左
胸に押し当てる。

「．．．．．動いてるよなあ」

そう、ここがあの世で俺が死んでいるのならまだそうやって結論づ
けられたのだが．．．．．俺の心臓は現に動いているのだ。

それは即ちまだ死んでいるわけではなく、生きたままこのあの世（
仮）に来てしまったことになる。

．．．．．訳分からん。

たとえばそうだとしても、どうやってこの場に俺は来たのか。

一度死んで目覚めたもう一つの俺の人格が勝手にやったのか？

それとも、あの場に摩訶不思議な第三者がやってきて俺を時空の間にでも落としたのか？

それとも――――

「……やめた」

そう言って、俺は諦めるようにその事について考えるのをやめた。

今、こんな事を考えていても仕方がない。分からないものは分からないし、分かった所でどうなる訳でもない。

「まあ、取り敢えずはあの集落まで行ってみるか。此処がどこなのか聞く必要があるし……聞く人がいるかどうか調べないとな」

そう呟いて、ゆっくりと歩を進めていく。

そうだ、俺が此処にこうやって息づいているのはどう考えてもおかしい。

おかしいと言うなら昨日(?)の晩の出来事から。

体感時間にしておおよそ半日。

この短い中でよく分からない事ばかりが起こっている。

こんな小説や漫画でしか有り得ないような出来事が、今実際にこの身に起きている。

ならば、そろそろ常識なんてものも通用するかどうか怪しくなってきた。

遠くに見えるあの民家に人がいるはず、なんて言う常識も通じないかも知れない。

願うならばそれが俺の身勝手な妄想であってほしいのだが……

「……………ほんと訳わかんねえな」

半ば自棄になってそう吐き捨て、俺は集落がある方角へ歩を進めていった。

足元には人が歩く道とは思えない、獣道が続いている。

歩を進めるにつれて周りにも徐々に雄々しい木々が見え始め、景色に圧迫感を感じ始めた。

その圧迫感はだんだんと形を成し始め、ついには今のように鬱蒼とした森が俺の周りを囲っていた。

そんな中を歩くこと約二時間。

森が途切れる気配は一向になく、視界には延々と続く緑、緑、緑。

「・・・・・・・・・・はぁ」

そりゃ、ため息の一つも吐きたくなるもんである。

街中を二時間歩くだけでも割と辛いのに、ほぼ変わらない景色の中を延々二時間歩くのは、さすがにとうとうかなり厳しい。

まるで同じところを何度も通っているような錯覚に陥ってくる。

人間、刺激の一つや二つなければ生きていくことすら億劫になる存在だ。

こんな所、一週間いたら確実に死にたくなる。

そんなことを考えながらも、足を止めたところで何かが起こるわけでもない、俺は足を止めることなく歩き続ける。

「…………俺、何やってんだろ？ 何だか知らん間に訳分からん黒いのに襲われて、一思いに心臓一突きされて殺されたと思ったら、実は死んでなくて、目が覚めたら知らない場所で……………」

嘆くも状況は変わらない。ただ、あの丘から見えた集落目指して歩くだけ。

まあ、それが直接の解決方法になるわけではないのだけれど。

せめて、話ができる人がもう一人この場にいれば大分心持ちも違うのだろうが。

「無い物ねだりしたってなあ…………その草むらからいきなり人が飛び出てくる訳でもない…………「わはー」…………し？」

そんな事を呟いた瞬間だった。

不意に目をやった草むらから金髪の美少女が飛び出してきた。

金髪。美少女。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「わはーーーー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ やっぱこれは夢だ。俺はやっぱり昨日(?)の昼からずっと今まで寝てるんだな。うん、そうに違いない」

「・・・・・・・・ 夢って寝てるものじゃないの?」

「そうだよ。だから、俺は寝てるんだ。今、こうやって立ってる事も、周りに見える森も、そして目の前の金髪美少女もすべて俺の浅はかな妄想なのさ」

「そーなのかー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

人とは一日でこんなにも意味の分からない出来事に遭遇するものなのだろうか？

純粹に気になってきた。

「えっと・・・・・・・・取り敢えずお前の名前聞いていいか？」

「ルーミアはルーミアなのだー！」

「オッケー、ルーミアな。じゃあ、ルーミア。俺の夢の産物だと思われる君に質問だ。婉曲的に君を生み出した俺は親みたいなものだから何でも正直に答えるんだぞ」

「親・・・・・・・・？　パパってこと？」

「そうパパだ。返事は」

「はい、パパ！ 何でも聞いて!!」

「……………何か今更なんだが、俺すごくバカなことしてないか？」

「……………じゃあ、一つ目。ここはどこだ？」

「もりー!!」

「ごめん。俺の聞き方が悪かった」

清々しいほどの答えである。何も間違っていない。

「あ……………じゃあ、この世界は何て名前だ？」

「幻想郷だよ！ パパ、そんなことも知らないの？」

「ああ、パパはあんまりお利口さんじゃないんだよ」

――――幻想郷。

聞いたこともない地名である。

「じゃあ、二つ目。この幻想郷に人はいるのか？」

「いるよ。この道をもうちよつとまっすぐ行ったら人里があるから」

元氣一杯に答えるルーミア。

どうやらあの集落にはちゃんと人が住んでいるらしい。

よかった。これで何とか現状の把握をしっかりできそうだ。

――――この少女が俺の妄想の産物でなければ、だが。

「ありがとな。じゃあ、俺はそこに行ってみるわ。ルーミアも来るか？」

「うん！ あっ、そうだ！ 私も聞きたい事あるんだけどいい？」

「んっ？ ああ、何だ？」

何気なくそう返すと彼女はこう言った。

「あなたは食べてもいい人間？」

夢（後書き）

昔のようなダークサイドな文章の書き方が分からなくなって来てる作者であります。

取り敢えず早く話をそれなりのところまで進めたいですね。

正直、今までのところは自分で読んでてもストーリーが見えてこないのであんまし面白くない（泣）

この面白くない部分を後々のストーリー展開に繋げていけたらと思います。

感想、ご意見はいつでもお待ちしています。読んでくださった方々ありがとうございます。また、お気に入り登録してくださった方々にも多大なる感謝を^^

捕食（前書き）

遅くなりました。
どうぞ

捕食

一瞬、自分が何を言われたのか理解が出来なかった。いや、たとえ理解したとしてもその言葉が真実なのか虚構なのか、その判別さえつかなかったに違いない。

それだけ、この少女が言うには酷く不釣り合いな言葉が俺の耳に入ってきたのである。

しかも、その言葉を発した本人は返事を待っているのかニコニコと屈託のない笑顔でこちらを見ているのだ。これはどうにも俺の聞き間違いだと思えるのが普通だと思ってしまう。

ふむ、ならばこの場合何と答えるべきなのだろうか？ 聞き間違いを素直に認めて、もう一度何を言ったか聞くべきか、それとも敢えてその聞き間違いに会話を合わせてみるのか……

まあ、黙りこむのも失礼だ。何かしらの反応をしなくてはならないだろう。

そう思い立ち、取り敢えず何か答えようと口を開いた時――――

目の前の彼女が突然消え失せた。

「……えっ？」

あまりにも一瞬で突然の出来事に俺は情けない声を上げ、目を丸くした。

そして、またも直ぐの出来事。俺の耳元をくすぐるように少女——
——ルーミアの声が聞こえてきた。

「……………イエスだね。ありがとパパ！」

その声が先ほどまでと何ら変わらない、無邪気で純粋な調子だったため、俺は直ぐに気づく事が出来なかった。

自分の右足に大きな穴が空いていた事に。

そんな彼女と目が合った。ルーミアは今までと何ら変わらない、とても楽しそうな表情で俺を見ている。この状況が当然だと、この状況に何の疑問も見当たらないと。
どこまでも嬉しそうに――笑う。

そうした瞬間、彼女の異質さによく気づいた。

ルーミアはその容姿から勿論考えられるように少女――小さい女の子だと十人中十人がそう考えるだろう。

小さいということは、その身体が成長している最中であり、あまり力もない。

単純な腕力だけなら高校生の俺に概算七、八歳の少女が勝てる訳もない。この状態を振り払おうと思えば、何時でも振り払える。

だが、今それが出来ない。

馬乗りになられ、両腕を地面に押さえつけられている腕を振り払う事が出来ない。

ルーミアの腕はその白く細い腕では到底想像できないほどの力で、俺の腕を押さえつけていた。

万力で締め付けられたように、俺の腕が潰れんばかりの力だった。

だからこそ異質。この状況下でこんな事が起こっている事の意味が

俺には全く理解できない。

「ふふ、じゃあねパパ」

そう言ってルーミアは顔を俺に近付けてくる。———なんだよ、
どうしてそんな事を言いながら俺に近づいてくる？

訳が分からない、一から説明しろ。

そう言ってやりたいのに俺の口から出るのはくぐもった呻き声だけ。
またルーミアと目が合う。彼女の眼はどこか生々しく、怪しい光を
帯びていた。

ああ、この少女は狩人だったのだ。俺はその目を見て訳もなくそう
確信した。

彼女は俺を同等と考えていない。彼女にとって俺は道端にいる虫の
ような存在なのだ。

よく小さい子供は何の疑問も持つことなく道端にいる虫を潰したり、殺したりする。それは単純に何も分かっていないだけだと言う反論があるかもしれないが、ならば大人になってからはどうなのだ。

大人になってもそういう人間はいる。無論、それが命と分かっている以上むやみに命を奪うような事はしないが、その個体が自身に危害を及ぼす可能性があるとなれば、同じ事をするだろう。

蚊や蜂などを潰したりするのが良い例だ。

自分よりも力では劣り、簡単にその命を奪うことができる。その重みを知らずに人は矮小な存在の彼らの命を無意味に刈り取る。

食においてもそうだ。弱肉強食。この理の中で頂点に君臨していると過信しているのが人間だ。

肉を喰らう為に鳥や牛や豚を殺し、魚介の幸を楽しむ為に魚類を獲り、栄養を補填する為に米や野菜を刈り取る。

多くの生き物を蹂躪しているからこそ得られる究極と言っていいほどの優越感。

それを身に受け、その行為に内包された罪を忘れてしまったからこそその過信。

それがあるからこそ人間は同種の人間以外を殺すことに躊躇いが無い。

では、何故人間は虫や魚や牛などを同価値の命として見られないのか。

理由は簡単だ。自分たちと意思の疎通ができないから、ただこれだけの瑣末な理由なのである。

自分たちの”言葉”というコミュニケーションが通じないからというどこまでも身勝手な理由だけでその生物を見下せる生物————それが人間。

捕食者と被捕食者。強者と弱者。支配者と従属者。

世界の真理。絶対の規則。

常にそうやって過ごしてきた俺も何ら変わりない。自分がその真理において上位の存在だと確信して已まなかった。

だが、今日の前の少女は俺を完全に支配している。

だから”狩人”————捕食者なのだと俺は確信したのかも知れない。

彼女はどこまでも純粹に俺を支配し、従属させている。

それが当たり前で、自分の考えを相手も持っているのが普通だと。まるで俺たち人間のようにどこまでも当然に、どこまでも一般的に

この行為に及んだ。

その純粹さが、

————どこまでも恐ろしい。

「いただきます」

ルーミアはそう言って、その可愛らしい小さい口を開ける。

その言葉で俺を本当の意味で捕食しようとしているのが理解できた。

しかし、何故だ。何故同じ人間である彼女が同種の俺を捕食する。

やはり、これは俺の夢なのか。それとも、彼女は幼いながらに人格が破綻しているのか。それとも————人間ではないのか。

ルーミアの口が迫る。恐怖が身体中を駆け巡った。

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。

自宅で一度死んで、助かったと安堵したにも関わらずまたすぐにこの仕打ち——いくら何でも酷いものである。

抗いたい、抜け出したい。この苦痛と恐怖から逃げ出したい。

” 殺せ。”

不意に頭にそんな考えが浮かぶ。

何を馬鹿な先の黒い塊のような得体のしれないものならともかく彼女は人間だ。

” 殺せ。”

でも、人間を喰おうとする人間なんているのか。そもそも、彼女は人間なんだろうか。

” 殺せ。
”

そうだ、別に良いじゃないか。これは正当防衛だ。俺は彼女に喰われかけて、自分の身を守る為に動くのだから。

” 殺せ。
”

「そうだ．．．．．」

今まで動かなかった口がすんなり動く。そして、自分が今まで聞いた事もない声でこう言った。

「殺してしまえ」

「霊符”夢想封印”！！」

その凜とした言葉が聞こえたのは、俺が言葉を発したのとほぼ同時だった。

おそらく女のものと思われる澄んだ声が聞こえると、俺の目の前にいたはずのルーミアが虹色の太玉に無防備に吹き飛ばされていた。

我に返り、仰向けのまま呼吸を荒げ茫然としていると、その視界に見知らぬ一人の少女が何食わぬ顔で姿を現した。

艶があり、癖もない真っ直ぐな髪。それを赤い大きなリボンで後ろに纏め、そのリボンに合わせるように赤を基調とした和服姿。

こちらを覗きこむその瞳は大きく、意思の強そうな光を放っていた。

彼女は俺の様子を一目見て、どこか怪訝そうな顔をするとその端正な口元を開いてこう言った。

「あんた、大丈夫？」

捕食（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております（＾－＾）

なんか、小説を書いているとやっぱり落ち着きます。仕事にしていけたら万々歳なんやけどなあ（＜―＞）

前進（前書き）

めちゃくちゃ更新が遅れました。この調子なら完結までにいくらかかるんだろう（泣）

前進

よく小説やドラマで見る描写——省略についてここで一つ語ってみたいと思う。

いきなりこんな話をされても何が言いたいのかが全くもって理解できないと思うが、そこは少し我慢してほしい。

省略——読んで字の如く、省いて略する事を指し示すわけだが、これがよく使われるのは例を挙げれば、いつもの学校の帰り道、普段どおりに過ぎて行った学校生活などである。

まあ、学校という場所に例が偏ってしまったのは単に俺が高校生だったというだけであり、そのあたりはあしからず。

そして、この方法が使われるのは特定の場合においてのみ。

それは語り手もしくはそれに準ずる話を伝える側の者が主に取り上げるべきことがないと判断した場合のことである。

さすがに物事を一から全て伝えようとした時には、そう言った何の変哲もない、何の面白みもない出来事だって付随してくるものだ。

まさか、小説の主人公が一步步くごとに「彼は右足を踏み出した」なんていう表現を逐一語られてはこの世の物語は全て完結することがなくなるに違いない。

まあ、何が言いたいかと言えば、この省略という表現は語るまたは説明するという状況においてはなくてはならない大切なものだとい

うことであり――

何故そんなことをわざわざ面倒くさい言葉を並べて説明したのかと言え、実に簡単な事でありたった今から俺がその表現に頼ろうとしているからである。

さて、ということとで今の俺の状況に至るまでを簡潔に省略して語るとしよう。

まず第一に、俺の目の前に現れた少女――博麗^{はくれいれいむ}霊夢は俺の味方と言える存在だった。

赤と白の珍妙な巫女服に身を包んだその少女は吹き飛んで行ったルーミアから俺を守るように前に立ち塞がった。

そして、凜とした声でこう一言。

――ルーミア、その卑しい口を閉じなさい。

それだけで体勢を立て直しこちらを伺っていたルーミアは見た目相応に不満げな表情で項垂れた。

それを確認すると、霊夢は話は後だと言わんばかりに俺を女性とは思えない力で担ぎ上げ、彼女の住む神社――博麗神社まで運んできたのだ。

今は貫かれた足の怪我を応急手当してもらい、包帯まみれの足によ

く分からない札のようなものを貼られて居間と思える部屋に座らせられている。ぶっちゃけここまでの展開が速すぎて何が何だか自分でも分かっていないのだが――

こんな右も左も分からない場所で親切にも（と言ってもかなり強引にはあるが）怪我の治療をしてもらい、なおかつ一息つける場所を提供してもらった彼女の好意を無碍にするわけにもいかない。

ならば、俺が取る行動は”素直に従う”この一言に尽きる。

身も蓋もないというか、何の捻りもないというか………けれども間違ったことをしていない事だけは確かだと胸を張って言える選択だろう。

「はい、どうぞ」

「あ、どうも………」

とまあ、こうして冒頭で偉そうに語ってみた”省略”という表現を使って今現在の状況を説明したところで、先の少女――博麗霊夢がお盆に乗せた三つの湯呑の一つを俺の目の前に置いた。

彼女は湯呑をもう一人の少女――ルーミアの前に置き、さらに自分の湯呑を手にとると俺と向かい合うようにして腰を下ろした。

ちなみにルーミアは俺のすぐ右隣で出された湯呑を興味深げに眺めている。

実際、この足の怪我の原因の大本たる彼女に隣に座られて内心気が
気でないのだが、というか何でついてきたんだろうかこいつ。

「それで？ 何だってあんなところにいたのかしら？ あなただっ
てあの場所が危ないって知らなかった訳でもないでしょうに」

「確かに森は危ないんだろうけどさ．．．．．現代の日本で暮ら
している身としてはそういう場所への危機感ってのは割と薄れてる
し．．．．．」

「なにそれ？ 何にせよあなたの不注意じゃない」

「はあ．．．．．すいません」

自分でも情けないと思うほど気の抜けた返事をする。

「とりあえず、あんたは人里に住んでる人間でしょ？ 今から行っ
たら遅くなるから今日はうちに泊まってきなさいよ。明日の朝一番
に送っていつてあげるから」

「ひと．．．．．ざと？」

あまり聞くことのないその単語に思わず首を捻る。

意味合いとしてはもちろん人が住んでいる里の事なのだろうが．．
．．．

俺の歯切れの悪い答えに彼女は訝しげな顔をして、視線を俺の胸元に落とす。

「そういえば、あなた見慣れない格好してるわね？　なにそれ？」

「いや、何ってただの学生服だろ。俺から見ればそっちのほうが十分見慣れない格好だと思うんだけど．．．．．」

そういう俺に彼女はいつそう眉をひそめる。

しかし、その表情も束の間。

次の瞬間には憑き物が落ちたように納得気な顔をし、わざとらしく手を叩いて彼女はこう言った。

「ああ、あんた外人か」

「外人？　外国人じゃなくて？」

「ええ、外人。最近多いのよねその手の人間とか．．．．．仕事が増えて嫌になるわ」

「はあ．．．．．仕事増やしてすいません」

何だか知らないが彼女は一人で納得して、お茶をすすり始める。

コロコロ表情が変わる人だなとかそんなことを考えながら、俺はその様子を黙って見ていた。

「なあ、そろそろここが何処か教えてもらえないか？ さっきルミア……さんにも聞いたけどここは幻想郷だっていう地名しか教えてくれなくてさ。ここは何県なんだよ？ というか、まず日本なのかここ？」

そう言った俺に霊夢さん(?)はどこか複雑な表情を浮かべた。

なぜそんな表情をするのか——それを聞くのは簡単である。

ただそれには多大な勇気が必要だった。

それはもちろんほぼ初対面の人の顔色をいちいち詮索していることを知られる事が恥ずかしいということが原因でもある。

しかし、今回はそれだけではない。

何故、勇気が必要なのか？

それは恐怖——

今の自分の不可思議な状況に対する至って素直な恐怖。

死んだはずの自分。

見たこともない景色。

そして、隣にいる少女の奇行。

元来、いろいろと考えすぎなきらいのある俺の頭の中にはいくつかの結論が浮かんでいた。

その中にはもちろん受け入れがたいものもある。

それが怖いのだ。

その質問をすることで、その頭にある受け入れたくない現実を突き付けられそうで……

自分でも情けないと思う。

けれど、俺は漫画や小説の主人公みたいに勇敢なわけでもないし、ましてやこの自分の状況を何とも思わないほど鈍い訳でもない。

いたって普通な高校生だ。

少なくとも自分ではそう信じている。

なら、これぐらいは当然の考えだと思う。

情けなかりうがなんだろうが、俺は怖い。

この状況が、この場所が、人が、風が。

自分が生きていることさえも———恐怖。

恐怖。恐怖。恐怖。恐怖。

右も左も上も下も縦も横も前も後ろも。

全てが混ざり合ってぐるぐるぐると。

頭がおかしくなりそうだ。

霊夢さんはそんな俺を見て、未だ口を閉じていた。

先ほどの複雑そうな表情から一変、黙っている俺の顔を凜とした表情で見据えている。

「……………なんで答えてくれないんですか？」

「私があなたの質問に答える義務はないもの」

そういう彼女は甘えを許さないと言わんばかりにきっぱりそう言い

捨てる。

「それに本当は理解しているような顔をしている奴に何か言うのも時間の無駄だと思わない？」

霊夢さんは何処となく気だるそうな面持ちでそう言った。それほどいうことなのだろうか？

いや、俺は本当は心の中では理解しているのだ。でも、納得できないだけの話なのだと思う。それは何処までも自分勝手に何処までもはた迷惑な話なのだが……

仕方ない事だと思う。俺は非常識に焦がれていてもその身はどつぷりともこれでもかと言うぐらいに常識に浸かってきた存在なのだ。

簡単に受け入れられるはずがない。この今いる世界が自分の生きていた世界とは違い、俺の持つ常識が当てはまることのない場所であることなどと。

信じられない。自らがそんな妄想にも近いことを考えているなんて、認めたくない。だからこそ、口に出さないのだ。

自分で口にしてしまえば、その根拠もない妄想を自分で肯定してしまう。そんなものはたまらなくみつともない。それなら、他人からどんな内容だろうが説明されたほうが幾倍もまし。

訳の分からない状況で俺が答えを先延ばしにし、今も沈黙を保っているのも結局はこんなちっぽけな矜持のためだった。

自分でもなんかすごく人間小さいなと感じるが、俺はごく一般的な人間だから。それが普通でそれが当たり前。

「ここは……」

けれど、それは正しいかと聞かれれば否。そんなことはない。だってそれはただの逃げだから。

この状況で戸惑いも不安も絶望すらもちろんある。だが、前に進むことをやめるのはそれだけで罪だ。

葛藤。選択。反省。また葛藤。人間、いやヒトはそれを繰り返さなければ何もできない存在。

その放棄はただの歩く屍。生産性のない肉の塊。

そうなんだ。だから、俺は分からないなりに前に進まなくてはならない。一度折れかけた心を叩きなおして、先の情けない弱音の続きを飲み込んで。

「幻想郷って言う異世界で間違いないんだな」

前へ進もう。

「ええ、その通り。ここは幻想郷。あなたみたいな境遇の人から見れば、ここが異世界ってのも見方としては正解。なによ、ちゃんと頭も回るし会話できるんじゃない」

俺の言葉に霊夢さんは肯定の言葉をかけると、軽く頬を緩ませた。

そのあまりにも自然な笑顔を顔上げて真正面から見た俺は顔が少し熱くなるのを感じた。

何というか先ほどまでいろんなことがありすぎたから、彼女の顔をしっかりと見る機会がなかったせいもあるがこう見ると彼女は相当な美人である。

そんな美人の笑顔を目の前に妙に気恥ずかしくなり、顔が火照ってしまう。

「いや、まあ、訳の分からない状況にいて少し俺も混乱してたからさ」

と愛想笑い付きで何とかごまかし、慌てて湯呑を手にとると少し冷えてしまったお茶を一気に流し込んだ。

「とはいえ、まだ混乱していることに変わりはないよ。何故俺がこんなところにいるのかとか、何故あんたが俺を異世界の人だと判断したのかとか……何故俺は生きているのか……とか」

「そうね。下手な同情はしないけどあなたのその感覚は至って正常なものよ。ひとまずあなたの頭がイッちゃてないことに私は一安心よ」

「初対面で悪いんだけどさ、あんた何か可愛げないよな」

「失礼ね。私なんて可愛さの塊みたいなものよ」

「出会い頭にルーミアをブッ飛ばした奴が言う台詞ではないよな、それ」

何だか会話をするうちに変な硬さも解れてきた。混濁していた思考も徐々にはつきりしていく。

「さて、じゃあこの世界についてある程度説明をしておきましょうか。それから、あなたの今後を検討しないかね」

そう言って、彼女はまた頬を緩ませた。そんな彼女の笑顔に俺も頷きと同じように微笑みを返した。

幻想郷

「さて、じゃあまず何から話そうかしら？ 何かリクエストとかつてある？」

取り敢えず彼女は出来るだけ親しみやすい口調でこう切り出した。

俺の気持ち完全に吹っ切れたわけでもないし、厳密に言えば俺の葛藤は何も解決していないのだけど、彼女はそんな俺に発破をかけるかのごとくその切り出しかたを選んだ。

別にそれを不快に思うでもなく、ただただ彼女のその身の変わりように呆氣にとられた俺は無言で首を横に振った。

「じゃあ、取り敢えずは幻想郷のことについて説明するわね。あなたも言った通りこの世界はあなたがいた世界とは違う異世界だって事は話したけれど、厳密に言えばその言葉は間違いよ」

霊夢はそう言って正座を崩す。正座が苦手なのかいたた、と呟く。

「この世界は文字通り『幻想の郷』。あらゆる世界において『幻想』となった存在が流れ着く、いわば忘れ郷わすれさとみたいな場所なのよ。だから、あなたの世界と異なった世界と言うよりは、裏の世界と言った方が表現としては正しいかもね」

なるほど。そう言われれば何かと納得が出来る気にはなる。

そんな不思議な場所なら、俺は死んだことによって幻想になったと
考えれば一応の筋は通るからである。まあ、そんな簡単なことでも
ないような気がするが……この理屈なら死んだ人みんなこ
こにいることになるしな。

「幻想ね……それって俺の世界で非常識と思われてたこと
がこの世界では成立しているってことに……なるのか？」

「そうね、魔法使いとか妖怪とか亡霊とか挙句の果てには吸血鬼や
死神なんてのがこの世界にはいるし」

「うわ、なんか聞きたくなかった。まじでそんなファンタジー満載
な世界に來ちまったのかよ」

何となく予想をしていたとはいえ、思わず頭を抱えてしまった。非
常識に憧れていたとはいえ、いざ直面した時には人間なんてろくな
行動が出来ないものである。

「ちなみに言っておくけど、あんたの隣にいるルーミアは妖怪よ」

「はあ!？」

そんな突然のカミングアウトに反射的にルーミアから距離を取った。当の本人と言えはいきなり動き出した俺を湯呑を傾けながら首をコテンと横に傾げ、心底不思議そうな目で俺を見ていた。

「どうしたの？ パパ。お話終わったのなら食べていい？」

「いや、決してよくないから。そして、そのパパってのはそろそろやめなさい。俺の性癖が疑われる可能性があるから」

「………？ そう呼んでって言ったのはパパでしょ？」

「話をややこしくするんじゃないですか！」

霊夢の視線がどんどん冷めていくのを感じる。さすがにこれは精神的にきつすぎる。これ以上話が流れるのは命（主に社会的な）が関わってくる。

「そ、それじゃあこの子は本当は妖怪で、一人でふらふらしていた俺を腹ごなしに喰おうとしていたってことなのか………？」

「ま、そういうことね。それを考えれば私の話も現実感を帯びるでしょう？」

「確かにこの上なく説得力があることは否定しないが………」

と、ため息をつきながら天井を仰ぐ。何だか納得もできるし、自身の身に起こった事を否定するつもりもないけれど、妙に現実とは未だ感じられないというか、たくさんの分からない事ばかりが起って、どこかボケてしまつて変にぼんやりしている。

まるでやの中で何もせず、ただただ突っ立ってるみたいだ。ここに何か目的をもつて来たわけでもないし、ここで何かをしたくなつたわけでもない。

そうだ。俺はまるで今抜け殻みたいになっているかもしれない。燃え尽き症候群というか、一度生を終えてしまつて、何かをしようと言う感情が抜け落ちてしまつているのかもしれない。

だから、自分を喰おうとした異質な存在が傍にいたとしても、怖がりつつも普通に会話が出来るのだろう。

「そういえば……………」

と、俺が呆けていると霊夢が何かを思い出したように声を上げた。

「どうした？」

「あんたの名前を聞いてなかったわ。あんたもさすがにずっとあんた呼ばわりは嫌でしょう？」

「ああ、そうだったな。俺は神部黒央。よろしく、霊夢……さん？」

「霊夢でいいわよ。私も黒央って呼ばせてもらうから」

「ん。じゃあ、取り敢えずお互いの名前も知ったところでこれから俺はどうすればいいのか考えなけりゃならない。そこでこの世界の事をもっと詳しく教えてほしいんだが」

「ええ、いいわよ。まあ、それも私の仕事のようなもんだし」

そう言って、俺達は再び話しを始める。まあ、色々思うところはあるが取り敢えずやることをやってから気持ちに整理をつけることにしよう。

約一時間後……

俺達は互いに自身の状況、境遇、そして持っている情報を交換または提供し合った。

霊夢から聞いたこの幻想郷の情報は想像していたより膨大だった。

まず、幻想郷内の地理。主だった場所である、博麗神社、永遠亭、紅魔館、人里、魔法の森、妖怪の山、冥界などなど。様々な場所が複雑に点在しており、中にはどこにあるのか分からないが存在が確認されているといった摩訶不思議な場所まであった。さすが、名前負けしない世界である。

取り敢えず名前だけでも覚えておいて損はないと。霊夢はあらかたの場所とその場での簡単な注意を俺に聞かせた。

次に、この世界における多民族との関係性である。先の会話にもあったようにこの世界には人間だけでなく、妖怪、妖精、亡霊、魔法使い、その他幻想種に該当する伝説上だと思われる人外が存在する。

基本的に関係性としては弱肉強食の世界。弱いものは糧となり、強いものが喰らう。そんな、何ともシンプルかつシビアな関係性。

ゆえに妖怪などに比べ、地の力が弱い人間は圧倒的に弱い立場にいるのだが、それをカバーするように人里には守護者と呼ばれる者があったり、あまりに多く妖怪側が人間を捕食した場合、この世界のバランサーとしての役目を担う『八雲家』、そして『博麗の巫女』がその帳尻合わせをしているとのこと。

しかし、それでも手が回らない場合に発揮されるシステムが『スペルカードシステム』と呼ばれるもの。

これは明らかに実力の差があるものが戦闘を行う場合、両者の合意のもとスペルカード（いわば必殺技みたいなものらしい）と呼ばれる護符を使いその美しさ、そして致死量に満たない『弾幕』と呼ばれるエネルギーの塊（？）みたいなものをどれだけ被弾させられるかといった勝負である。

この勝負によって妖怪に一方的に殺されてしまう人間はいくらか減らせるとの事。ただ、このスペルカード……使用者の力の大きさが反映されるため、強大な力を持つ者のスペルカード（または弾幕）はシステムなど無視して対象者を殺してしまうこともあるらしい。

何というか穴あきだらけのシステムだが、これで幻想郷は今のところ順調に回ってはいるようだ。

そして、幻想郷の実力者に共通する『能力』のことについても教えられた。

この幻想郷において実力者と呼ばれる様々な存在。それらのほとんど全てはその個人だけの特殊な力を有しているらしい。それをひとくぐりに能力と呼ぶらしい。

因みに霊夢にもルーミアにも能力があるらしく、興味本位で聞いてみると……

「なんでわざわざ自分の力をひけらかすようなまねしなきゃなんないのよ。もしかしたら、あんたが敵になる日も来るかもしれないし

ね」

「ルーミア、ど忘れしたー」

と、霊夢からは何やら物騒な言葉をルーミアに至ってはどうしようもない言葉を聞かされ、素直に引き下がった。まあ、霊夢の言うことはもつともであるが、心なし少しショックである。

とまあ、聞かされた大まかな幻想郷の情報はこんなところだ。

そして、次に俺は自分の境遇を霊夢に話す。

この世界に来る前に起こった非常識な出来事。その不可思議な存在に自分が一度命を奪われた事。一度失った命がこうして甦り、またしてもルーミアに殺されてしまいそうになった事。

俺が知りうる限りの状況を包み隠さず話した。

全てを話終わった時、霊夢は腑に落ちないと言った表情で俺の顔を覗き込んでいた。

「今の話が全部本当なら、どうも納得できない話になるわね」

「まあ、にわかには信用できない話だよな。未だに自分でも半信半疑だし」

「ああ、別にその話自体を信用してないって訳じゃないのよ」

——ただ、納得できないってだけでね……と、霊夢は言葉を濁す。

「私から言わせてもらえばその黒い塊とか、目覚めたら知らない場所^{ところ}にいたとかそういうった”非日常”は”日常”なのよ。腑に落ちないのはそこじゃなくて、”あんたは死んだはずなのに幻想郷^{こく}にいる”って事」

「でも、死んだって事は俺の存在が幻想となってしまうたとも考えられる訳だろ？　なら、理屈で言えば俺がここにいるのも道理じゃないのか？」

俺の意見に霊夢は即座に首を横に振る。

「死は別よ。だいたい、その理屈でいったら幻想郷の生き物全員死んでることになるじゃない」

そうだ。先に自分が言ったことを忘れていた。やはり、この世界は死者の世界と言うわけではないようである。

「死は存在の消失よ。一個体としての生命がその躍動を止めてしまうこと。幻想は人々の記憶からその存在が消えてしまうこと。似たようで意外と違ってるのよねこれが」

とにかく、と霊夢は頬杖を付きながら続ける。

「あなたは少なくとも死んではないのよ。死ねば今ごろ魂だけになって、三途の川を死神の漕ぐボロ舟で渡っているはずなんだから。あなたはちゃんとした肉体を持って、三途の川どころか私の神社でこうして茶をすすっている。それが何よりの生きてる証拠よ」

そうか．．．．．俺はちゃんと生きていたみたいだ。訳の分からない怪物に一方的に命を奪われただけではなかったのだと彼女の言葉で今更ながらに安堵した。

そうだ、俺は生きている。生きて今ここにいるのだと。世界は違えどもこの命が続いている事に変わりはない。

その事実が、なによりその実感が俺の胸を急激に襲った。込み上げてきたものを必死に抑え、俺は霊夢を見据える。

「まあ、原因は分からないけどよかったんじゃない？ 死んだらそれまでなものね」

「ああ、本当にその通りだ」

そう答えて不意に神社の開け放たれた襖へと視線を移す。そこには落ち葉一つ落ちていない殺風景な境内の様子があった。

しかし、その光景には言葉では表しようのない神聖さを感じ取るこ

とが出来た。何もない、ただそれだけの場所であるのにも関わらず、俺はその何でもない光景にこの数秒で目を奪われる。

ただ、それだけ。

ただ、それだけの事が俺の心からくすぶり続けていた不安を取り除いてしまった。

そして、俺は視線を戻し――――

「俺は………生きてるんだ」

そうはっきりと自分に言い聞かせるように呟いた。

「さてと、それじゃああなたの今後の話になるけれど」

互いの状況確認、情報交換がある程度終わると霊夢は現在直面した問題へと話を移した。

「まず、基本的な事を聞くが俺は元の世界には帰れるのか？」

「今すぐは難しいわね。黒央がこちらに來た理由は結局分からずじまいだし、こちらの世界から元の世界に戻るには博霊大結界をどうにかするか、手っ取り早く幻想郷を作った奴に頼んでみるかの二つに一つ。前の案はどうしても大がかりなものになるから最低でも一年ほどかかってしまうし、後の案はあまりおすすめはできないし……」

「幻想郷を作った奴ってのは……そんなにおっかないのか？」

「掴みどころのない娯樂を糧にするような妖怪よ。氣に入らないって理由だけで喰われたくはないでしょう？」

「そりゃ手に余るな……」

となると俺は少なくともおおそ一年ほどこちらの世界にいらなくてはいいことになる。

それは仕方のない事だし、あきらめるしかないだろう。それに不満を霊夢にぶちまけたところで、直接関わっていない彼女に関してみれば八つ当たりもいいところである。

そうすると、当面の生活場所と食事の確保が問題になってくるのだが、この世界で頼れる人などいない俺にとっては中々シビアな問題だ。

野宿覚悟は仕方ないとしても、食糧に関しては何処で何が手に入るかなどの情報がこれっぽちもない。何とかして、飲み水も確保していかなくてはならないし．．．．．これは本格的にサバイバル生活だな。

「まあ、何とかなるかな．．．．．？ 妖怪とかに気を配りながらのサバイバル生活になりそうだけど」

「あら、別に神社には空き部屋がごまんとあるからそこを使ってくれてもいいのよ？」

「もちろん俺としてはその方が大助かりなんだが．．．．．ただでさえ恩義のある霊夢にこれ以上迷惑をかけるのは気が引けるっていうか．．．．．」

「なら、この一年間でその恩を少しずつ返してもらえばいいわ。それにこっちは半分仕事のようなものだし、何かと男手があると助かりそうだしね」

今のところ一番の解決法というか収まり所は確かにその案なのだが、それが本当に自分のためになるのかと考えると、どうにも快く賛成することが出来なかった。

別にもっと快適に過ごせるところがあるんじゃないかとか、そういったことを言っているのではなく、この世界で生きていくにあたっての自分の心の持ちようの問題である。

恐らく霊夢の神社に世話になれば、安全で快適な生活は保障されるに違いない。ルーミアの件で霊夢の力の強さは素人目から見ても、十分強いことが分かったし、そんな人が傍にいるならば一年間無事に命を落とすことなく生きていける可能性は飛躍的に跳ね上がるだろう。

しかし、それで本当に自分は霊夢に恩を返すことが出来るのか……
…… 答えは否だ。例えば、霊夢の身の回りの管理を俺が一手に引き受けたとしても、命を救ってもらうことへの借りには決して及ばない。

自分に何の力もなく、この世界に蔓延る幻想の存在に太刀打ちなどできないことはとうに分かっている。

しかし、それを理由に自分が何もせず他人に縋り付くのは人としていかなものかと思えてならないのだ。

何も力がないからこそ、何の当てもないからこそ、俺はこの世界で多くの人外から自分の命を守り抜くために必死にならなければいけないはずなのだ。

たまたま今回は運良く霊夢と出会っただけで、本当なら俺はあの場でルーミアに喰われてもおかしくなかったのだから。

だからこそ俺は自分の力を最大限活かしてこの世界を一年間生き抜かなければならないのだ。

「申し出は嬉しいけど……やっぱり俺は霊夢の世話になるべきじゃないと思うんだよ。恩を返しきれないかもしれないとか、そんな貸し借りの理屈だけじゃなくて、結果的にとはいえ俺自身の問題に他人を不用意に巻き込むのはやっぱり気後れするしな」

「その心がけは立派よ。けれど、幻想郷こくはあなたが思うほど楽に生きられる場所じゃないわ。昼も夜も妖怪や妖精、性質の悪い幼獣が自分を生かすために、楽しむためにあなたのような力のない獲物を待ちわびているの。対抗する手段——それも相手の命を奪えるほどのものがなければ抵抗もできずにぼろきれのように殺されて終わりの世界。そんなところであなたはどうかやって自分の力だけで生きていこうと考えてるわけ？」

そう言う霊夢の表情は厳しかった。俺の顔を真剣な眼差しで見つめ、妥協を許さないような厳格な雰囲気醸し出している。

「確かに俺には何の力もない。けど、最低限の事は自分でしないと気が済まないんだ。言うなれば、ちょっとした男の意地みたいなもんだよ」

「呆れた。意地で命を捨てるつもり？　男ってよく分かんないわね．．．．．」

「ほんと．．．．．分かんねえよな」

俺は霊夢の言葉に苦笑を浮かべながら、そう言い返す。本当に自分でもそう思う。男は不便な生き物だよ、例えこの選択で命を落としたとしてもそれでもいいと思えてしまうのだから。

いや、もしかしたら俺はこのぶっ飛んだ現状のおかげで頭までぶっ飛んでしまったのかもしれないが．．．．．

俺の苦笑交じりのその答えに霊夢はあきらめるかのようにため息を吐いた。

「はあ．．．．．ま、何もせずに文句ばかり垂れる奴よかマシ

か。取り合えず、黒央の言い分は理解したわ。けれど、あなたの言い分通りにすることは残念ながらできないわ」

「なっ……！！　ここまで言ってもダメなのかよ」

「ダメもダメ、ダメダメよ。まず、せっかく私が救った命をそんな簡単に捨てるような真似は私が納得できないわ。それに……」

そこまで言って、霊夢は少し口を閉じ、何処か恥ずかしげな表情を浮かべ――――

「見ず知らずの人間を見捨てるほど私は薄情じゃないもの」

そう言い切った。

「霊夢って……　意外に人情深いんだな」

「……っ!?　ああもう!　こんなこっ恥ずかしい事言うんじゃないのわ!　というか、知り合って数時間しか経たないあんたが私の何を知って”意外”なんて口にすんのよ!」

霊夢は恥ずかしいのかわずかに頬を紅潮させると、自分の目の前の湯呑を手に取りや否や俺めがけてぶん投げてきた。

「お、おい！　いくらなんでもあぶねえだろうが！」

「うっさい！　第一、そんな理由抜きにしてもあんたには私に返さなきゃならないでっかい借りがあるでしょうが！　それを全部清算するまでは神社で延々と下働きしてもらわなきゃ勘定が合わないわよ！」

霊夢は一気にそう捲くし立てると、不機嫌そうに立ち上がり部屋から出て行った。

突然の事に少し呆気にとられながらも、俺は気づくと笑みを浮かべてしまった。

彼女の精一杯の照れ隠しがあまりにもおかしくて。

「ねえ、なんで霊夢はあんなに怒ってたの？」

その一部始終を見ていたルーミアが不思議そうに俺に訪ねてくる。

「さあな、でもこれだけは言えるぜ」

「・・・・・・？」

「女はよく分かんねえってことだよ」

「変なパパ」

「パパはやめなさい」

こうして、俺はこの幻想郷の博霊神社に居候させてもらう身の上となった。

まあ、かなり不安は大きいが何とかしてやっていくことにしよう。

初めての朝

雲一つない青空。空気は現代とは比べ物にならないほどに澄み渡り、猛々しく木々が群を成し、それぞれが目いっぱい空に向かって伸びていつている。

見渡せば終わることのない大自然。人工物を見ることが珍しい幻世界。

その名は———幻想郷。

現実世界で排他された幻想の存在が集う忘れ郷。

そんな世界にいきなり来たとわれ、未だに驚きを隠しきることはできない。

現実だと理解していても、心の何処かでこれは性質の悪い夢なのじゃないかと感じている。

そんな気持ちはこの世界で一晩過ぎた後も消えてなくなるような事はなかった。

この世界と現実の世界の境界たる博麗大結界。その管理者にして、幻想郷のバランスを担う博麗神社の巫女——博麗霊夢。

彼女に危機を救われ、この世界の情報を聞き、様々なやり取りを通して、結果この博麗神社に居候という形に落ち着いてから始めて向

かえる朝。

昨日、様々な話を話し、聞き、体験し、心に整理をつけてから眠りについたはずだった。

しかし、朝起きれば先の通りだ。俺はまだ何も整理出来ず、未練がましくずるずると自分の気持ちを引きずっていた。

こんなことは当たり前。そう当たり前なのだろう。

人間、皆その日の気分というものがある。

例えば、昨日人生を決定づけるような一大決心をしたとしても、どこかアンニュイな気持ちに浸って、あやふやな思考に没頭する日もあるのだ。

結論、今日はそんな日なんだろう。と半ば諦めたように俺は眠気が未だ残る頭を軽く揺すった。

軽く眠気を飛ばし、自分の寝ていた布団を畳むため身体を起こす。

それにしても、布団で寝ることなど何とも久しぶりな事だった。自宅では何時もベッドを使っていたし、何時もより視線が低いのも新鮮だった。

たまには慣れない環境もいいものだな、と素直に感じていた。

布団を客間の押し入れにしまい、その場で一つ大きく伸びをする。

そこで不意に自分の足に視線を落とす。そこには、何時も通りの左足と包帯をこれでもかと巻き付けられ、その周りによく分からないお札が貼られた膝より下が物凄くゴツくなった右足があった。

見た目のバランスもさながら、まるでこの右足が危険なもので封印されているかのような様子は誰が見ても奇妙な出で立ちである。

しかし、本当に奇妙なのは風穴の空いたこの右足が、包帯と数枚のお札の処置だけで痛みもなくこうやって普段通りに機能している事だった。

現実的に考えれば、この右足はすねの中心に野球ボールほどの穴を空けられた時点で構造的に自力で立つのは不可能なはずなのだ。

仮に何かの奇跡で立つことが出来たとしても、そこには想像を絶する激痛がついてくるはずである。

だと言うのに、それすら感じない。まるでこの右足だけが自分のものではないみたいだ。

「ほんと、不思議な所だよな」

俺は思わず呟き、押し入れの扉を閉めるとそのまま部屋を後にする。向かうは居間。そこで霊夢が待っているはずだ。

「おはよう。よく眠れたかしら？」

「ああ、ゆつくり出来たよ。ありがとう」

居間に顔を出すと、予想通りというか当たり前なのだが霊夢が茶をすすっていた。軽く挨拶を交わすと、朝食を持ってくる、と席を立ち、台所へと姿を消す。

感謝の言葉を伝えながら、ちゃぶ台の前に座る。そこで既に座っていた人物に視線を移した。

「おはようございます。萃香さんお早いですね」

そこには頭から二本の角を生やし、瓢箪を煽りながら満足そうな顔でこちらに微笑みかけている少女がいた。

「おお、黒央！ やっと起きたかこの寝坊助め。お前が起きないから退屈で退屈で死にかけたじゃないか」

と少女——伊吹萃香^{いぶきすいか}はケラケラと腹を抱えて笑う。

彼女は昨日、話が終わりルーミアがフラフラと神社を後にしたのに入れ替わるようにやってきた人物である。

背丈は子供のそれほどしかなく、その背丈と同じ程の長さの淡い橙の髪。

そのどう見ても子供にしか見えない彼女はあろうことか自分は”鬼”だと名乗った。

鬼——日本の昔話に出てくる並々ならぬ力を持った人外の種族。体感時間で約14時間、この世界に來たばかりの自分であったならおそらく鼻で笑っていたであろう事実も、霊夢と話を終えた後の俺にとっては不思議なぐらいすんなり受け入れられた話だった。

「どうした？ そんなすつとぼけた顔して。朝っぱらから私に見惚れるのは仕方ないかもしれないかもしれないが」

「断じて違います。自分の身体見てから物を言っして下さい」

そう受け入れた話だったはずだ。にも関わらず、俺は今萃香さんを

目の前にして奇妙な違和感を感じていた。

「あの、萃香さん。萃香さんって本当に鬼なんですよね？」

「そうだよ。正真正銘、真っ当な鬼そのものさ。昨日、ちゃんと説明しただろう？」

「そうですけど、確認しておきたかったというか、何か……」

煮え切らないんだよな。と、俺は口には出さず心の中でそう言葉を繋げる。

思考と感覚がちぐはぐになっているようなこの気持ち悪さ。頭では理解していても、身体が拒絶する。目の前の少女が鬼であるという現実を。

「一晩休んで、冷静になったら私の存在に疑問を持ったってところか。私が嘘を吐いてるんじゃないかって顔だね」

「い、いえ、別に萃香さんの言うことを疑ってる訳じゃ……」

「でも、完全にも信用出来てないんだろう？」

萃香さんのその言葉に俺は押し黙る。事実、その通りだ。先の感覚の正体は言葉に表すとそういう事になる。

「そう気負う事はない。それは人としては当然だろうよ黒央」

萃香さんはそんな俺を励ますようにそう言葉をかけてくる。

「いきなり訳も分からない場所に飛ばされて、その上理解し難い現状を受け入れようとしたんだ。頭が少し自棄になってたって不思議じゃない」

萃香さんは一口瓢箪を煽り続ける。

「要は無理に納得しようとしたしわ寄せみたいなのさ。その違和感。自分の今までの日常が通用しないなら、誰だって疑心暗鬼になるもんだよ」

「……そうなんですかね」

「ま、私の勝手な言い分だがね。正解かどうかは自分自身にしか分

からないさ」

だから、この問答には何の意味もない。と、萃香さんは続けると瓢箪を俺へと差し出す。

「飲むかい？」

「いや、いいです」

「つれないねえ、飯が出来るまで暇なんだから付き合っとくれよ」

「俺も手伝って準備してきますからもうちょっと一人で待ってて下さい」

そう言って、ケチだの意気地無しだのと文句を垂れ流す萃香さんを尻目に霊夢のいるであろう台所に移動する。

調理場では霊夢が慣れた手付きで調理をしていた。巫女服の袖を肘までたくしあげ、真っ白なエプロンをかけた彼女は何とも頼りになりそうな料理人ぶりである。

「何か手伝おうか？」

俺が声をかけると、霊夢は少し驚いたように振り返る。

「ああ、ありがと。じゃあ、そこのおかず持ってっていつてくれる？」

「わかった。遠慮せずに何か手を貸す必要があったら言ってくれ。ちゃんと働かなきゃいつまで経っても恩返しできないからな」

「……朝から嫌な話を蒸し返すんじゃないわよ」

少し狼狽え、視線を反らす霊夢。その動作が昨日の話を混ぜ返されたことへの照れ隠しであることに気づくのは容易な事だった。

「少し………安心したわ」

「……何がだ？」

突然の霊夢の言葉に俺は思わず聞き返す。

「一晩経ってから錯乱する外来人とかって割と多いのよ。それで自分から命を絶つ人とかも……ね。さすがに寝覚めが悪いし……」

そう言う霊夢は軽く笑みを浮かべる。それはただただ寂しげで、そんな気持ちをせめて面には出すまいといった表情だった。

そうだ。俺だってそうになっていたかもしれないのだ。

見知らぬ世界で、見知らぬ空気で、見知らぬ景色で、見知らぬ人がいて。

そんな右も左も分からない状況にいることを理解しても、何も分からない恐怖は消えなくて。

そんな気持ちに折り合いがつかず、自ら人生を終わらせてしまうことも十二分にあり得た話なのだ。

現に萃香さんの時の違和感はその断片のようなものだ。

けれど――――

「大丈夫」

俺は胸を張ってそう言える。

確かにまだまだ自分が幻想郷（この場）にすることに現実感はないけれど――

「俺は大丈夫だよ。霊夢」

目の前にいる少女に救われたこの恩義があればそんな馬鹿な気も起こらない。

そう、彼女のおかげで俺は胸を張れる。

「心配してくれてありがとな」

素直にこう言える。

俺の言葉に霊夢は呆然としていた。いきなり言われた事に戸惑いを隠しきれないのか、何を言ってるのか理解出来なかったのか、彼女の胸中は定かでないが心底驚いているという事だけは明らかだった。

沈黙——気まずいにもほどがあった。その沈黙の中で何かおかしい事は言っていないかと自分が何を言ったのかを振り返る。

途端に尋常じゃないほどの恥ずかしさに見回れた。

何を言ってるのだろうか俺は。何をいっちゃまえに気取った言葉を並べたのだろうか。

これじゃあまるで彼女に対して格好つけてるだけに見えるじゃないか。さっきの気持ちに嘘はない。けれど、それを説明すると言いつにしか聞こえないだろうし……！

罰ゲームのような思考のループ。何とかしようと思えば思うほど泥沼にはまっていく。

「じゃ、じゃあ、この出来た料理運んどくな！」

そこで俺は逃げるという行動をとった。慌てて料理の皿を両手に乗せ、振り返りもせずに茶の間に向かった。

S i d e 霊夢

いきなりの言葉に私は呆然とするしかなかった。

昨日、散歩がてらに助けた同い年ほどの男。特に変わった様子もない平凡な男だった。

それは昨日の押し問答のような話し合いでも分かった事。ただ少し一般人より頭が回りそうで、決断力がありそうな程度。

そこからある程度整った容姿を除けばただの平凡な男に過ぎなかったはずだ。

それがどうして――

どうして彼の一言だけでこんなにも心がスッキリとしているのか。

『大丈夫』

理由は分かっている。私はこの言葉を聞きたくて仕方なかったのだ。助けた人が一晩経つと死んでいる。その度にわざわざ涙を流すほど私は感情移入しやすいタイプではない。

遺体の処理や部屋の掃除も億劫だったし、迷惑といえはその通りだった。

けれど、外来人の保護は博麗の巫女に課せられた義務といってもいいほどの役目でもある。やらなくてはならない。例え結末が気に入らなくとも、心が荒みかけても、ずっとずっと。

もちろん、全てが腑に落ちない結果に終わった訳ではない。中には元の世界へすぐに返す事も出来た人もいる。

しかし、そのどれもが自分の事にしか考えが及ばず、礼の一つもなく嬉々として帰っていっただけだった。

私はただ見返りが欲しかったのだ。大それたお返しじゃなくていい、

たった一言”ありがとう”という感謝だけでもいいから欲しかったのだ。

自分が役にたったという実感。私の行動が無駄ではなかったという証明。それを形として欲しかった。

そうでなければ、私の行動に意味を見出だせなくなってしまいうから。博麗の巫女の仕事という名前のただの作業に成り下がってしまうから。

そんな気持ちを面に出すことはなかったけれど、何よりも人間らしい自分は満足することなく私の中に潜み続けていた。

だからこそ、彼の一言はまるで魔法のようだった。

諦めかけていた気持ちを掬い取ってくれた。

我に返ったように彼は急ぎ背を向ける。自分の行動を恥ずかしがるようにそそくさと部屋を後にする。

「お礼なんて……こっちの台詞よ。……………バカ」

知れず零れる憎まれ口。それと同時に頬を伝う一筋の雫にすら私は
気づくことが出来なかった。

俺が自分の発言の恥ずかしさに部屋から逃げ出した後、俺はまともに
霊夢の顔を見ることが出来なかった。

本当に穴があったら入りたいぐらいだ。タイムマシンがあるなら、
過去の自分をぶん殴ってでも止めてやりたい。

その後始まったこの世界での初めての食事。それは何とも言えない
ギクシャクした空気の中で進んでいった。

「……………」

「……………」

「……………」

無言の食卓。向かい合う形の霊夢は所在なげに箸を動かしながら俺

にチラチラと視線を移し、萃香さんはそんな霊夢の様子を横目に見ながら、俺に何があったと言わんばかりに視線を向け続けるし、そんな中俺は居心地が悪く二人と目をあわさないように明後日の方向を向いている。

何だこの状況。どうしてこうなった。いや、十中八九俺が原因なのだろうけど、何で霊夢まで恥ずかしがるような素振りを見せてんだよ！

そりゃ、女の気持ちなんか知るわけもないが、霊夢ほどの美少女がそうモジモジされるとこっちまで余計に恥ずかしくなってくる。

そして何より萃香さんの視線が痛すぎる！ さっきからこの人、器用な事に視線を俺から全く背けることなく食卓のおかずを箸でつまみ口に放り込んでいる。

何か手を打たないと精神的にも肉体的にもボロボロになりそうな気がする。

「さ、さて、今日は何をしたらいいのかなあ。取り敢えずはこの足をどうにかしなきゃならないから……医者の所にでも行ってみるかなあ。でも、診察代なんてないからそれをどうにかしなきゃならんし、まずは働き口を探すべきかな？ そこんとこ、色々と情報が欲

しいんだけど何かないかなあ、霊夢さん」

「ええ、そ、そうね……」

「さて、そろそろ霊夢があんたの空気を変えようって言う魂胆見え見えの話に対して、浮わついた返事であんたと視線を合わせられないくらいに浮いてる理由を聞かせて貰いたいもんだねえ？ 色男さん？」

「断じて俺は何もやってない！！」

しかし、そんな足掻きも所詮は悪足掻きでしかなかったらしい。というか、はぐらかす所かより分かりやすくなって返ってきた。

「こんな霊夢の様子を見て、何もしてないなんて信じられるわけないだろう！！」

「でも、心当たりは一つもないんだよ。何かしたなら俺が知りたいくらいだ！ なあ、霊夢……俺何か変な事言ったのか！？」

「そ、そんなことないわよ！ 今のはちょっとぼーっとしてただけだから」

俺の懇願にも似た訴えに霊夢は我に返ったように慌てて取り繕った。しかし、その不自然さは一向に健在である。

「全くもって、それが、本当には思えないんだけど……………」

「大丈夫よ！ 萃香！！ 仮に私が何かされていたなら、その時は黒央は既にあの世に逝ってるはずだもの」

「何かえげつない事言われた気がするんだけど!？」

正直、信じたくもない言葉だった。こんな暴言を吐いている目の前の巫女さんが、先ほどまでのどこか寂しげな雰囲気を持った少女と同一人物だとは到底思えない。

けれどもまあ、自分の行動が関係していると考えられる以上、例えば心当たりがなくとも、例え無意識であろうとも、悪いのは俺と言うことになるのだし、あまり強く言うことはできない。

ここまでのやり取りで、ありがたみが何か薄れている気もするが、一応命の恩人だし……………

「オホン！ とにかく！ 私は大丈夫だし、黒央も別に悪くもなんともないわ。それよりこれからどうするか？ だったわよね？」

霊夢がそう半ば無理やり話を終わらせる。萃香さんはどこか不満げに俺と霊夢を交互に見ているが、俺としては霊夢がそう言ってくれて心底ほっとしていた。

「まずは、黒央のその足を治すことが先決ね。知り合いに腕だけはいいい医者を知っているから、今日はそこに行きましよう」

「そうだな．．．．．さすがにこのままっていうのは俺もどうかと思うし．．．．．で？　そこは何て所なんだ？」

「迷いの竹林の奥にある月の使者達が営む診療所『永遠亭』よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053s/>

東方光闇録

2012年1月14日22時54分発行